

ほとけ 第1章第2節 最後の教え（p19～）

1. 釈尊はクシナガラ郊外のシャーラ（沙羅）樹の林の中で最後の教えを説かれた。弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、自らをともしびとし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法をともしびとし、よりどころとせよ、他の教えをよりどころとしてはならない。わが身を見ては、その汚れを思ってむさぼらず、苦しみも楽しみもともに苦しみのもとであると思つてふけらず、わが心を見ては、その中に「我」はないと思ひ、それらに迷つてはならない。そうすれば、すべての苦しみを絶つことができる。わたしがこの世を去つた後も、このように教えを守るならば、これこそわたしのまことの弟子である。
2. 弟子たちよ、これまでおまえたちのために説いたわたしの教えは、常に聞き、常に考え、常に修めて捨ててはならない。もし教えのとおりに行うなら常に幸いに満たされるであろう。教えのかなめは心を修めることにある。だから、欲をおさえておのれにかつことに努めなければならない。身を正し、言葉をまことあるものにしなければならない。貪ることをやめ、怒りをなくし、悪を遠ざけ、常に無常を忘れてはならない。もし心が邪悪に引かれ、欲にとらわれようとするなら、これ

をおさえなければならない。心に従わず、心の主となれ。心は人を仏にし、また、畜生にする。迷って鬼となり、さとして仏と成るもみな、この心のしわざである。だから、よく心を正しくし、道に外れないよう努めるがよい。

3. 弟子たちよ、おまえたちはこの教えのもとに、相和し、相敬い、争いをおこしてはならない。水と乳のように和合せよ。水と油のようにはじきあってはならない。ともにわたしの教えを守り、ともに学び、ともに修め、励ましあって、道の楽しみをともにせよ。つまらないことに心をつかい、むだなことに時をついやさず、さとりの花を摘み、道の果実を取るがよい。弟子たちよ、わたしは自らこの教えをさとり、おまえたちのためにこの教えを説いた。おまえたちはよくこれを守って、ことごとくこの教えに従って行わなければならない。だから、この教えのとおりに行わない者は、わたしに会っていながらわたしに会わず、わたしと一緒にいながらわたしから遠く離れている。また、この教えのとおりに行う者は、たとえわたしから遠く離れていてもわたしと一緒にいる。

4. 弟子たちよ、わたしの終わりはすでに近い。別離も遠いことではない。しかし、いたずらに悲しんではならない。世は無常であり、生まれて死なない者はない。今わたしの身が朽ちた車のようにこわれるのも、この無常の道理を身をもって示すのである。いたずらに悲しむのをや

めて、この無常の道理に気がつき、人の世の真実のすがたに眼を覚ま  
さなければならない。変わるものを変わらせまいとするのは無理な願  
いである。煩惱の賊は常におまえたちのすきをうかがって倒そうとし  
ている。もしおまえたちの部屋に毒蛇が住んでいるのなら、その毒蛇  
を追い出さない限り、落ち着いてその部屋で眠ることはできないであ  
ろう。煩惱の賊は追わなければならない。煩惱の蛇は出さなければな  
らない。おなえたちは謹んでその心を守るがよい。

5. 弟子たちよ、今はわたしの最後の時である。しかし、この死は肉体の  
死であることを忘れてはならない。肉体は父母より生まれ、食によっ  
て保たれるものであるから、病み、傷つき、こわれることはやむをえ  
ない。仏の本質は肉体ではない。さとりにある。肉体はここに滅びて  
も、さとりは永遠に法と道とに生きている。だから、わたしの肉体を  
見る者がわたしを見るのではなく、わたしの教えを知る者こそわたし  
を見る。わたしの亡き後は、わたしの説き遺した法がおまえたちの師  
である。この法を保ち続けてわたしに仕えるようにするがよい。弟子  
たちよ、わたしはこの人生の後半45年間において、説くべきものは  
すべて説き終わり、なすべきことはすべてなし終わった。わたしには  
もはや秘密はない。内もなく、外もなく、すべてみな完全に説きあか  
し終わった。弟子たちよ、今やわたしの最後である。わたしは今より  
涅槃に入るであろう。これがわたしの最後の教誡である。

(p 19～p 27)

.....

はげみ 第2章 実践の道 第1節 道を求めて 9. (p 319～)

9. 昔、スダナ（善財）という童子があった。この童子もまた、ただひたすらに道を求め、さとりを願う者であった。海で魚をとる漁師を訪れては、海の不思議から得た教えを聞いた。人の病を診る医師からは、人に対する心は慈悲でなければならないことを学んだ。また、財産を多く持つ長者に会っては、あらゆるものはみなそれなりの価値をそなえているということを知った。また坐禅する出家を訪れては、そのしずかな心が姿に現われて、人々の心を清め、不思議な力を与えるのを見た。また気高い心の婦人に会ってはその奉仕の精神にうたれ、身を粉にして骨を砕いて道を求める行者にめぐりあっては、真実に道を求めるためには、刃の山にも登り、火の中でもかきわけてゆかなければならぬことを知った。このように童子は、心さえあれば、目の見るところ、耳の聞くところ、みなことごとく教えであることを知った。かよわい女にもさとりの心があり、街に遊ぶ子どもの群れにもまことの世界のあることを見、すなおな、やさしい人にあっては、ものに従う心の明らかな智慧をさとった。(p 319～p 321)

.....

12. おのれに恥じず、他にも恥じないのは、世の中を破り、おのれに恥じ、

他にも恥じるのは世の中を守る。懺悔（ざんげ）の心があればこそ、父母・師・目上の人を敬う心も起こり、兄弟姉妹の秩序も保たれる。まことに、自ら省みて、わが身を恥じ、人の有様を見ておのれに恥じるのは、尊いことといわなければならない。懺悔の心が起これば、もはや罪は罪でなくなるが、懺悔の心がないならば、罪は永久に罪として、その人をとがめる。正しい教えを聞いて、いくたびもその味わいを思い、これを修め習うことによって、教えが身につく。思うこと修めることがなければ、耳に聞いても身につけることはできない。「信」と「ざん」と「ぎ」と「努力」と「智慧」とは、この世の大きな力である。このうち、智慧の力が主であって、他の4つは、これに結びつく従の力である。道を修めるのに、雑事にとらわれ、雑談にふけり、眠りを貪るのは、退歩する原因である。（p 3 4 5 – p 3 4 7）

- 1 3. 同じく道を修めても、先にさとる者もあれば、後にさとる者もある。だから、他人が道を得たのを見て、自分がまだ道を得ていないことを悲しむには及ばない。弓を学ぶのに、最初に当たることが少なくても、学び続けていればついには当たるようになる。また、流れは流れ流れてついには海に入るように、道を修めてやめることがなければ、必ずさとりは得られる。前に説いたように、眼を開けば、どこにでも教えはある。同様に、さとりへの機縁も、どこにでも現われている。香をたいて香気の流れたときに、その香気の、あるのでもなく、ないので

もなく、行くのでもなく、来るのでもないさまを知って、さとりに入った人もある。道を歩いて足に棘を立て、疼きの中から、疼きを覚えるのは、もともと定まった心があるのではなく、縁に触れていろいろの心となるのであって、一つの心も、乱せば醜い煩惱となり、おさめれば美しいさとりとなることを知って、さとりに入った人もある。欲の盛んな人が、自分の欲の心を考え、欲の薪がいつしか智慧の火となるのもであることを知って、ついにはさとりに入った例もある。「心を平らにせよ。心が平らになれば、世界の大地もみなことごとく平らになる。」という教えを聞いて、この世の差別は心の見方によるものであると考えると、さとりに入った人もある。まことにさとりの縁には限りがない。(p 347－p 349) . . . . .